

戦後日本外交史

Ⅶ

日本外交の課題

山本 進 安原和雄 山村喜晴
山本剛士 石丸和人 松本博一 著

三省堂

後日本外交史

本外交の課題

山本 進 安原和雄 山村喜晴
山本剛士 石丸和人 松本博一

著

三省堂

やまもと すずむ **山本 進** 1918年、神奈川県生まれ。1942年、東京大学経済学部卒。毎日新聞社論説副主幹を経て、現在武蔵大学経済学部講師。主著『東京・ワシントン』（岩波書店）

やすはらかず お **安原和雄** 1935年、広島県生まれ。1958年、一橋大学社会学部卒。毎日新聞社編集委員兼論説委員。主著『白い共産主義』（学陽書房）『ユーロ・コミュニズム』（教育社）

やまむらよしはる **山村喜晴** 1933年、富山県生まれ。1957年、一橋大学経済学部卒。毎日新聞社論説委員。主著『三菱軍需廠』（現代評論社）『銀行審査部』（実業之日本社）

やまもととし **山本剛士** 1936年、鳥取県生まれ。1961年、横浜国立大学経済学部卒。毎日新聞社経済部記者を経て、現在文筆業。主著『朝鮮を考える』（亜紀書房）『日本の経済援助』（三省堂）

いしまるかず と **石丸和人** 1928年、広島県生まれ。1953年、東京大学文学部卒。毎日新聞社ワシントン支局長、論説委員を経て、現在山形新聞社論説委員。主著『裸のアメリカ』（毎日新聞社）『アメリカの本音が爆発する日』（広済堂）

まつもとひろかず **松本博一** 1922年、埼玉県生まれ。1944年、旧満州国建国大学政治学科卒。毎日新聞社モスクワ支局長、論説副主幹を経て、現在日本大学国際関係学部教授。主著『激動する韓国』（岩波書店）『80年代への視点』（聖公会出版）



戦後日本外交史 VII 日本外交の課題

一九八五年五月三〇日 第一刷発行

定価 二、五〇〇円

◎著者

山本 進 安原和雄

山村喜晴 山本剛士

石丸和人 松本博一

発行者

株式会社 三省堂

代表者 上野久徳

発行所

株式会社 三省堂

〒三 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集 (03) 2301-2211

販売 (03) 2301-2211

振替口座 東京 六一五四三〇〇〇

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

〈戦後外交史VII・38〉

Printed in Japan

ISBN4-385-34792-1

戦後の東西の縄張りをきめたヤルタ会談から四十年という区切りのいい年に、あわせて七巻の『戦後日本外交史』を刊行することができました。執筆者を代表して、読者の皆様のこれまでの御支援に厚く感謝します。

この第七巻は、そのしめくくりの意味をこめて、「日本外交の課題」という枠組みを設けて、第六巻までの執筆者に、それぞれ一つのテーマを選んで八十年代の外交を論評して貰うことにしました。

八十年代もすでに折返し点に達し、前方を見れば二十一世紀の開幕もそう遠い先のことではなくなっています。現に、近代化を急いでいる中国は、二十一世紀がはじまるまでに、今からみて四倍の経済力を、身につけようとする目標をかかげて、驀進中です。うかうかしていればその時はすぐ来てしまうので、のんびりしてはいられないわけでしょう。

このように二十一世紀は、夢物語に耽けるための遠い未来ではなく、現在の延長そのもののものです。日本は、二十一世紀に向かって、何を目ざすべきなのでしょう。この問いにどう答えるかによって、外交政策への期待と評価も変わってくることでしょう。この問題は、言い変えれば、第六巻までの「はしがき」で触れたように、経済大国化した日本の次の一步は？ ということにもなりましょう。

その場合、わたしたち執筆陣は、軍事大国化してはならないという方向性の点で、一致していたことは言うまでもありません。しかし、八十年代になると共に、年々、その傾向が濃くなることに危機感を深めないわけにはいきません。その原因がどこにあるのか、歴史に照らして、その根っ子を明らかにすることが必要です。

各巻毎に、重要な外交文書などの資料を織りこんだこの七冊を読みかえすことによって、日本の未来に暗くおはいかぶざっている、このような動向への歴史的認識を深めることが出来ると思います。それにしても、一冊の

本にまとめるテーマは、この他にも沢山ありますし、この枠組みを基本にしながらも、中味として、重点や内容を変えた方が、よりよくなったのではないかと、反省される点もないわけではありません。

しかし、現代の外交問題を、歴史的視野から把握、位置づけることは、執筆する者の視座そのものが揺れ動き易いだけに、これでもう完璧という成果を生むことは、まず無理ななしでしょう。こう書くと、この七冊の本の欠点に予防線を張っているようにとられるかもしれませんが、こういう困難があるからこそ、これまでこういう風にまとまった形で、戦後日本外交を取上げた試みがなされなかったのではないかと思います。

それだけに、わたしたちは、正直なはなし、どうやらひと仕事終えたという、極く控え目な安堵感を味わっています。一つの山を越せば、さらに高い山が視野に入ってくるように、しめくりのこの第七巻を出発点として、ここに盛られたさまざまなテーマを、さらに歴史に即して追求する仕事、待ちうけています。

その場合の新しい視座として、わたしは国家そのものの変質と国際社会の構造的ともいべき変化に、目を注いでみたいと思います。たとえば、中国が、日本が、米国が……というような主権国家別の縦割りの問題の建て方では、おさえきれない事柄の比重が一層大きくなるように思われるからです。国境を越えた企業活動という形で、この種の問題は、経済分野でまず現れ、環境問題にも酸性雨による森林の破壊の場合のようにはっきり示されていますし、核戦力中心の軍事体系は、地球どころか宇宙空間を舞台にする時代になっています。国際社会を構成する主役に、国家だけでなく個人や民間組織が、登場してくる時代です。

十九世紀に生まれ育った主権国家万能の時代は終わろうとしています。だとすれば、**「国益」**を唯一の物差しにして、外交を論じること自体が古めかしい発想となるのでしょうか。

(やまもと・すすむ 一九一八年、神奈川県生まれ。一九四二年、東京大学経済学部卒。

元毎日新聞社論説副主幹。現在武蔵大学経済学部講師。主著『東京・ワシントン』)

『戦後日本外交史』全七巻内容構成

第一巻 米国支配下の日本（石丸和人著）

第一章 徹底した日本の非武装化

1 「日本、ついに無条件降伏」——ホワイトハウスの発表／日本政府の回答／占領された日本／消滅した帝国陸海軍

2 憲法で非武装日本の恒久化を——動き出した憲法改正／ワシントンの関心——天皇制／天皇制保持に傾くマッカーサー／連合国に根強い天皇制反対／「国体護持」を願う日本政府／マッカーサーの介入／登場した「戦争放棄」／ある米外交官の危惧／マッカーサーの意図

3 危険な芽は残さず——苛烈な賠償取り立て計画／「緩和」へ必死の「日本外交」／賠償は戦争能力の剝奪／精神面も武装解除

第二章 朝鮮戦争の衝撃と日本の再軍備

1 転換へ動く米対日政策——マッカーサーの信念／「講和の早期締結を」／国務省の対日講和構想／実らなかつた早期講和——中ソの反対／米政府の懸念——非武装日本／芽生えた日本再武装論

2 歴史を変えた朝鮮戦争——激化する東西冷戦／「日本」に影を落とす冷戦／米軍部、「早期講和」に反対／米統合参謀本部、日本の再軍備を進言／マッカーサー、ペンタゴンと対立／マッカーサーの敗北／警察予備隊の急造

第三章 対日講和に進む米国

1 「講和」で分裂する米政府——「早期講和を」——国務省、統合参謀本部に強く反論／「日本は政治的資産」——ダレス／対立を複雑にしたマッカーサー／マッカーサー構想に対する懸念

2 「在日基地」を軸に妥協（——マッカーサーの転換／一役買った池田訪米／朝鮮戦争、「米軍駐留」を固める

- 3 米政府、講和へ原則で一致——トルーマンの裁断／国務、国防両長官やつと合意／全面講和か単独講和か(1)
——曲学阿世論争

第四章 始まった平和条約草案づくり

- 1 ダレス、まず連合諸国を打診——米国の講和七原則／連合諸国の疑問
2 ソ連の反応——米ソ、ニューヨークの応酬／ソ連の覚書と米国の回答
3 講和をめぐる条件——安全保障条約の準備／沖繩をどうするか／ダレスの手紙

第五章 ダレスの訪日

- 1 ワシントンの情勢——ダレス訪日へ動く国務省／統合参謀本部の抵抗
2 講和へ日米の話し合い——ダレスを迎えた日本／日本政府の準備／吉田・ダレス会談／吉田の条件／語るダレス、沈黙の吉田／安保と日本の再軍備／事務当局会談／「満足すべき了解」——吉田・ダレス最終会談／日米、了解文書に仮調印

第六章 講和に次々と難問

- 1 出てきた米英の対立——ダレスの予惑／「中国」と「造船」を持ち出した英国／対立の焦点、「中国」
2 ダレス、再度の訪日——マッカーサー解任と講和／ダレスの目的／吉田・ダレス、「英国案」を討議／賠償・補償——米側の見解／ダレス、滞日最後の追い込み

第七章 多数講和へ最後の詰め

- 1 米英、ロンドンの合意——ダレス、英国へ飛ぶ／講和に中国は参加させず／「北方領土」をどうするか／厳しくなった賠償条項
2 米英共同草案と日本——アリソン、日本政府に説明／日本政府の関心／沖繩に日本の潜在主権
3 サンフランシスコを目指して——続く米ソの応酬／調印はサンフランシスコで／平和条約草案を発表／全面講和か単独講和か(2)——新聞の苦悩

第八章 サンフランシスコ講和会議

- 1 その前夜——米国の招請状／難産の日本全権団／確定した平和条約草案／秘密にされた安保条約草案／ソ連、出席を回答／日本全権団を迎えた米国
- 2 オペラーハウスの五日間——対日講和会議開く／封じられたソ連の反撃／四九か国、平和条約に調印／日米安保条約にも調印

第九章 日本、独立を回復

- 1 日本の批准が第一条件——批准審議に入った日本国会／芦田・吉田の論戦／最初の寄託国は日本
- 2 ジレンマの国府承認——批准への米議会の要求／米政府、積極的に動く／渋る吉田、押すダレス／ダレスが書いた「吉田書簡」／一人歩きする「吉田書簡」
- 3 難航した行政協定の締結——根深い対立の芽／国務省、軍事優先に反対／焦点は「統一指揮」と「裁判権」／一か月もかかった日米交渉
- 4 米国の批准——上院の承認——反対は一〇票
- 5 一九五二年四月二八日——決まった平和条約の発効／最後の儀式

資料

- (一) カイロ宣言 (二) ヤルタ協定 (三) ポツダム宣言 (四) 日本国とアメリカ合衆国との安全保障条約 (五) 日本国との平和条約

第二巻 動き出した日本外交（石丸和人・松本博一・山本剛士著）

はしがき

プロローグ

第一章 ソ連との国交回復（石丸和人著）

- 1 発端と接触——日比谷公会堂の熱気／鳩山、念願の首相に／口火を切った重光外相／予想外！ ソ連の積極

的反応／ソ連の巨大な変動／ドムニツキー書簡―最初の接触／日本政府、「交渉」に動き出す／合意へのジグザグ／「六月一日からロンドンで」―日ソようやく合意

2 交渉への準備―核心は領土問題―からむ米国／抑留者の早期送還を―一変した北洋漁業／国連加盟のためにも／貿易の安定化に／強い反対勢力―立たぬ基本戦略

3 実らなかったロンドン交渉―第一次交渉の歩み―好調な出足／早くもソ連の平和条約草案―消える樂觀論／交渉長期化の様相／明るい兆し―ソ連、齒舞諸島・色丹島で譲歩／生かせぬソ連の譲歩―複雑な東京の対立／日本、国後・択捉の返還を要求／刺激した重光演説―交渉中断へ／フルシチョフの平和攻勢―「非は日本に」／強気の日本の世論

4 予測された行き詰まり、第二次交渉―政界再編成―強まる対ソ強硬論／国際的支持を求める日本―「千島」と米、英、仏／再開されたロンドン交渉／領土問題で再び中断

5 局面を開いた漁業交渉―河野農相の登場―ソ連、北洋漁業を制限／水産業界にショック―日ソ漁業交渉へ／遅れた河野のモスクワ入り―裏に重光の懸念／順調に進んだ交渉／河野―ブルガーニン会談と漁業交渉の妥結

6 重光外相、モスクワに飛ぶ―鳩山の考え―領土は棚上げ／意外、重光外相が首席全権に／領土までも対立の焦点に／重光の変化／またも交渉中断

7 鳩山訪ソへ―二つに割れた自民党―鳩山訪ソを決意／分裂する自民党／鳩山訪ソの五条件／鳩山五条件の背景―ソ連に根回し／ブルガーニンも書簡で確認／波紋―米政府の公式見解／無理な米政府の主張／松本全権急ぎモスクワへ―領土棚上げを確認／抵抗の中の訪ソ決定／通じなかった鳩山の心情

8 日ソ共同宣言―一年ぶりの復交、国連加盟も―鳩山首相モスクワに／復交へ順調な出足―クレムリン会谈／焦点、「領土」をいかに書くか／消えた「領土の継続審議」―ソ連、主張を貫く／日ソ交渉ついに妥結／クレムリンの調印式／冷たい日本の反応／「鳩山引退」で取り引き／国会審議の不満と疑惑／国会承認―反主流

は大量欠席／日ソついに復交―国連加盟も

第二章 日中国交正常化（松本博一著）

1 戦後の日中関係——「虚構の選択」のツケ／「積上げ方式」による時代／第四次貿易協定、成立から破棄へ／日中交流に「政治三原則」／安保闘争と日中関係の打開／保守良識派政治家の貢献／佐藤内閣と日中関係の後退／国連代表権問題で反中国／韓国・台湾条項の波紋

2 米国と中国との接近——米中対立と朝鮮戦争／米中にそれぞれ接近の動機／ニクソン訪中発表のショック／米中上海共同コミュニケ

3 日中国交樹立——中国の国連復帰成る／正常化（盛り上がる国民世論／経済界の目も中国へ／田中内閣、日中正常化に取り組む／橋渡しにつとめる野党党首／田中首相の訪中決まる／日台条約処理と戦争状態終結／田中―ニクソン会談で了解工作／正常化へ日中共同声明／戦争賠償の放棄を宣言

4 日中平和友好条約の締結——四つの実務協定を結ぶ／航空協定に親台湾派が反対運動／航空協定調印で外相談話／平和友好条約、反霸権でソ連横やり／反霸権条項めぐり交渉難航／平和友好条約ついに調印／大平訪中、現代化路線への協力／プラント建設停止の問題／教科書検定問題で中韓両国が抗議／軍国主義的傾向に厳しい目

5 米中正常化とその影響——米中外交関係を正常化で合意／台湾問題のハードル越す／米中関係自体の価値／日米安保条約と中国の態度

第三章 日韓国交正常化（山本剛士著）

1 分断朝鮮の誕生——植民地支配の終焉／米ソの分割占領／分断国家の樹立

2 日韓交渉の開始——占領軍の指示で／李承晩ライン／相次ぐ拿捕／日韓会談始まる／日本嫌いと朝鮮人嫌い／請求権問題

3 会談再開とアメリカの圧力——岸政権で会談再開／張勉内閣で会談進展の気配／経済協力方式浮上／アメリカ

カの圧力／ベトナム戦争とともに

4 活発化する日韓交流——政治会談に比重移る／請求権の範囲／ルビコン川を渡る／活発化する日韓交流

5 交渉の妥結・調印——盛り上がり欠く反対運動／自民党内の事情／高まる韓国の反対運動／佐藤政権で急進展／椎名訪韓で仮調印／交渉妥結・調印

資料

(一) 日本国とソヴィエト社会主義共和国連邦との共同宣言 (二) 合衆国声明 (三) アメリカ合衆国と中華人民共和国との間の外交関係樹立に関する共同コミュニケ (四) 日本国と中華人民共和国との間の航空運送協定 (五) 中国・韓国両政府から記述変更を強く求められていた教科書問題についての政府見解——官房長官談話 (六) 日韓条約の諸協定 (七) 日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約

第三巻 発展する日米関係（石丸和人著）

第一章 対等の日米関係をめざして

1 岸内閣の成立と日米関係——岸信介の強運／日米間の問題点／続出する基地反対闘争／ジラード事件／アメリカの不満——日本は防衛力増強を／池田・ロバートソン会談／逃げ切った池田／戦後、岸の出発点／憲法改正論者——岸／「日米」調整に動く岸外交

2 岸訪米の前夜——対照的な両国の空気が／訪米の地固め／東南アジア歴訪と訪米準備／防衛力整備計画／見守る国内世論／関心高めるアメリカ／くい違う日米論調——毎日新聞とニューヨークタイムズの主張

3 岸訪米——日米新時代を求めて——まずゴルフ外交／岸・ダレス会談／歓迎の裏——難航した共同声明／共同声明の核心——くい違う日米／安保再検討へ——日本紙、安保再検討にふれず——米紙／安保再検討を否定——ダレス／岸、否定に反論

4 日米共同声明の幻想——藤山外相の登場／ワシントンの動き——米軍撤退の発表／日米安保委員会の設置／安保の実態／日本政府の努力——安保を国連の枠に

5 ようやく安保改定交渉へ——ダレス、安保改定を語る／藤山・ダレス会談——安保改定で合意／好意的なニューヨークタイムズの論評／合意の背景／積極的だった日本外交／安保条約の問題点と改定交渉の開始／米側草案

6 難問、バンデンバーグ決議——「相互援助」要求の上院決議／日本国憲法に抵触／アメリカの配慮——「太平洋地域」／モンロー・ドクトリン方式／条約範囲は「日本区域」／潜在主権とのジレンマ／「沖縄除外」が勝つ

7 強まる改定反対の声——社会党、安保廃止を要求／ストップした国会審議／政府の対応——沖縄を除外／事前協議の構想と核持ち込みの拒否／中国、激しく批判／外務省直ちに反論／固まる藤山構想／強い党内の反対／ソ連も反対を表明

8 難航する交渉——対立激化の自民党と日米交渉の中断／強まった社会党の反対／台風の目——河野、沖縄除外に反対／藤山試案／条約適用は「日本区域」／行政協定も大幅改定へ／中国と組む社会党／自民党安保条約改定要綱

9 再開日米交渉——四か月ぶりの再開／新安保条約大筋で合意／交渉、行政協定の改定へ／ビッチあげる交渉／社会党、真つ向から挑戦——「安保が平和を保障」——岸首相／厳しい河野派の反対／岸グループ対党人派——矢面に立つ藤山／割れる社会党／自民調整、最終段階に／残る問題、「条約期限」

10 日米交渉大詰めへ——日米対等へ——進む行政協定改定交渉／藤山報告「妥結は近い」——社会党、報告に反論——「事前協議は拒否権なし」——社会党／固い政府の態度——背後にアメリカの意向

11 調印前夜——デモ隊、国会になだれ込み／調印は六〇年一月一九日／首席全権は岸首相／日本政府、調印文書を採択

12 日米、新安保条約に調印——日本全権団、裏道から出発／歓迎するワシントン／署名された文書——「新しい同盟国——日本」、ニューヨークタイムズ／懸念を示す日本の論調／嵐をはらむ波紋／ソ連の非難——「歯舞・色丹

は返さず」

13 新安保、激突の中の発効——安保一色、第三四通常国会／本格化する調戦——「事前協議」への懸念／はつきりしない「極東の範囲」／タイムーリミット、五月二〇日／衆議院ついに強行採決／激突の幕明け／ハガチー事件とアイク訪日の中止／発効—幕閉じた六〇年安保

第二章 「戦後」を終えた沖縄返還

1 アメリカ支配の続く沖縄——アメリカ、手放せぬ軍事的価値／運命の平和条約／返還に動く岸内閣／保持強めるアメリカ—高等弁務官の新設／融和に出たケネディ／失望する沖縄

2 佐藤内閣の登場——佐藤と沖縄／最初の佐藤—ジョンソン共同声明／佐藤首相の沖縄訪問、「戦後は終わらず」／沖縄の疑念

3 米政府、「返還」へ動く——佐藤、施政権の分離返還に反対——大津談話／目標は米大統領の言質／佐藤首相、再びアメリカへ／基地つき施政権の返還を—佐藤／「再三年内に返還時期のめどを」——共同声明／アメリカ、返還に前向き—共同声明の意味／無視できぬ日本の要求

4 固まる「返還」への基盤——小笠原諸島の返還／沖縄の主席を公選に／非核三原則の登場／「沖縄の核」は白紙—首相／軍事基地の撤去を—成田／情勢の変化を待つ—首相／国力に応じた防衛力を—首相／基地付きで暗黙の合意／野党、非核武装決議案を提出、政府、強く反対

5 アメリカにニクソン政権——ジョンソン引退のショックとニクソンの勝利／佐藤の三選／米新政権との交渉へ／難しい本土並み—アメリカ主張

6 佐藤首相の決断——七二年・核抜き・本土並みへ——返還時期は七二年／佐藤、「核抜き・本土並み」に踏み切る／沖縄に核は不要／沖縄基地の別扱いは無理／安保も憲法もそのまま適用／「言うつもりで言った」——佐藤／早かったアメリカの核撤去の原則／岸訪米—伝えられた日本の意向／沖縄返還に前向き—ロジャース國務長官

7 合意への準備——本格化する接触／愛知外相の訪米／「事前協議」で柔軟に——日本側／アメリカの懸念——基地の維持／「会談は建設的」——愛知／「交渉は成功」——ロジャース／自信強めた日本政府／東京交渉へ動くアメリカ／グアム・ドクトリン

8 東京交渉——始まった共同声明草案づくり／東郷アメリカ局長の原案／「核」は佐藤—ニクソン会談で／佐藤訪米で最終合意へ／合意への周辺／バード決議／佐藤—野党党首会談

9 佐藤—ニクソン会談——決まった沖縄返還——警戒の中の寂しい出発／佐藤—ニクソン会談／七二年・核抜き・本土並みで合意——共同声明／米側の見解——ジョンソン次官の説明／重要なナショナル・プレスクラブ演説／日本の安全と結びつく韓国、台湾／安保条約の無期限維持／事前協議、イエスもノーも／日本が払った代償——「イエス」もある事前協議／「核」で確認されたアメリカの権利／「事前協議」——アメリカの解釈／「本土の沖縄化」——米側の成果

10 一九七二年五月一日——沖縄返還協定／相次ぐニクソン—ショック／衆院の非核三原則決議と返還協定承認／ぎりぎりの国会通過／サンクレメンテ会談／沖縄、二七年ぶりに復帰

資料

(一) 日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約 (二) 条約第六条の実施に関する交換公文 (三) 日米共同声明 (四) 琉球諸島および大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定

第四巻 先進国への道程 (安原和雄・山本剛士著)

第一章 廃墟のなから (安原和雄著)

1 戦争の負の遺産——マーク・ゲインの印象記／自立経済基盤の崩壊

2 財閥の解体とその後——ニュー・ディラーの思想／反財閥のエドワーズ報告／憎しみの対象だった財閥／甘かった日本側の対応／最後まで抵抗した三菱／日本経済に占める財閥の地位／同床異夢の持株会社整理委員会／指定から脱落した金融機関／バージと「誤訳の効用」／強引に成立させた過渡経済力集中排除法／緩和さ

れた巨大企業再編成／「カウフマン報告」と政策転換／よみがえった企業集団

3 政策転換映し出した賠償——衝撃与えたポーレー報告／浮上してきた経済復興／ロイヤル演説と「反共の防壁」／負担の軽減と東西冷戦

4 抵抗のなかの農地改革——マッカーサーの評価／ししぶ応じた吉田茂

5 無償ではなかった食糧援助——一〇〇〇万人餓死説／「パンかさもくば弾丸を」／衆議院の感謝決議

第二章 経済の自立をめざして（安原和雄著）

1 荒療治だった経済九原則——ドッジの竹馬経済論／対日占領政策の転換／一九四九年度予算の組み替え／「見返り資金」の新設

2 一ドル三六〇円決定の内幕——晴天の霹靂／温室経済からの脱却／ヤング勧告とドッジ案

3 僥倖だった朝鮮特需——蔵相池田勇人の放言／「はからざるこぼれ幸い」／吉田茂の心配／エコノミク・アニマルの原点／ダレスとの秘密会談

4 アジアの兵器廠へ——よみがえった「死の商人」／兵器特需と経済界／マーケット声明／幻の再軍備計画／池田・ロバートソン会談／MSAをめぐる日米交換文書／小麦資金で兵器生産軌道へ

第三章 東南アジアへの賠償（山本剛士著）

1 中間賠償取り立てから無賠償方針へ——ポーレー案をもとに／フィリピン、強硬に反対／「存立可能な経済」の枠／日本、積極姿勢に転換／岡崎外相の歴訪

2 賠償支払いは四か国——まずビルマから／合意、そして挫折／藤山日商会頭が政府代表に／スカルノの密使／米アジア戦略の補強／「ニワトリ三羽で二〇〇億円」

3 賠償の経済効果——賠償は投資／重化学工業化のテコ／準賠償

第四章 開放体制へ向かって（安原和雄著）

1 国際経済社会に復帰——IMF加盟に調印／出資割当額に不満／GATTにも正式加盟／加盟反対の急先峰、

イギリス／日本を支援したアメリカ／「もはや戦後ではない」

2 三五条援用に抗して——GATT東京総会／シロンアメリカ代表の演説／三五条援用国の主張／特異だったフランスの立場

3 池田首相、ヨーロッパへの旅——機中の記者会見／三年前の岸訪欧／西ドイツとフランスの違い／日米英三位一体論／トランジスター商人／池田・マクミラン会談／三五条援用撤回の約束／訪欧帰国報告演説会／日米、ヨーロッパの三本柱／軍事力を欲しがった池田

4 「成人の日」迎えた日本——IMF八条国に移行／「明治維新につぐ歴史的時期」／樂觀論と悲觀論／國際競争力強化が合言葉／「ミスター八条国」の来日／足並みが乱れた事情／通産省・フリードマン論争／政治折衝に乗り出した三閣僚／名医の再度の来診／「世界の大勢」に順応／国内の不安と危惧／幸せな嬉しい日

第五章 日米貿易經濟合同委員会の足跡（安原和雄著）

1 焦点となった國際收支問題——池田・ケネディ会談／日米安保条約第二条の意味／岸内閣から池田内閣へ／晩秋の第一回箱根會議／日米間の貿易不均衡／グローバル・ベースとは／ドル防衛とアメリカの立場／日米間の「黒字定着」論争

2 外資導入と利子平衡税——日本襲ったケネディ旋風／確約避けた共同声明／典型的な債務国／電力借款始末記／外資導入の効用

3 貿易拡大と対共產圈貿易——GATT三五条と日米協力／自由化宣言の意味／KRめぐる国内の不一致／「めざましい成功」と評価／輸入制限撤廃で強硬なアメリカ／対共產圈貿易で対立／ケネディの「中共封じ込め」発言／池田政権から佐藤政権へ

4 先進国・日本の地位——日米の摩擦と一体化と／「先進国への道」とは

資料

(一) 降伏後におけるアメリカ合衆国の初期の対日方針 (二) 日本占領及び管理のための連合國最高司令官に対する降

伏後における初期の基本的指令 (三) 占領政策転換、日本経済自立化についてのロイヤルアメリカ陸軍長官演説
(四) 日本に対し指令される経済安定計画 (五) サンフランシスコ平和条約の賠償規定 (六) フリードマンIMF為替制
限局長のIMF対日年次協議最終日に行なった講評全文 (七) 池田総理大臣・ケネディ大統領共同コミュニケ (八)
日米貿易経済合同委員会共同コミュニケ (第一回～第九回)

第五章 経済大国への風圧 (山村喜晴著)

第一章 経済大国の光と影

- 1 所得倍増計画の成功——「経済の季節」への転換／安定成長の「極大化」／「驚くべき日本」
- 2 国際収支の黒字定着——下村・吉野の論争／経済見通しが全て狂う／小刻み切り上げの提言
- 3 貿易・資本の自由化——閉ざされた日本／手さぐりで開放体制へ／下駄と畳表の自由化／近代経済学者の自由化論／現代インソープ物語
- 4 GNP第二位の悩み——一人当たり所得は二〇位／繁栄の「むなしさ」／調整インフレ論／政策運営の立場／皮肉な「福祉元年」

第二章 先進国間の軌轢

- 1 「日米繊維戦争」——
- 2 引くに引けぬ事情——綿製品協定の教訓／進まぬ日本の輸入自由化
- 3 日米首脳会談の疑惑——佐藤首相の密約説／日本の重大な譲歩／幻のケンドール案
- 4 日米繊維交渉の第二の山場——宮沢通産相の苦心案／「戦後初の自主外交」／政府間交渉を再開
- 5 日米繊維交渉の第三の山場——日本の一方的自主規制／ついに「見切り発車」

第三章 通貨外交の展開

- 1 ニクソン・ショック——日本中が揺れる／強いドルと弱いドル／日本の市場だけが開く
- 2 柏木顧問の「索敵旅行」——まずフランスへ飛ぶ／そのとき日銀に何が起こった／円、変動相場制に移行